

砂時計のように

富岡多恵子

中央公論社



砂時計のように

岡多恵子

公論社



砂時計のように

定価二二〇〇円

昭和五十六年十月二十日 初版印刷
昭和五十六年十月三十日 初版発行

著 者 富岡多恵子

発行者 高梨 茂

印刷所 三 陽 社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七
振替東京 二一三四
©一九八一 検印廃止

砂時計のように

たとえば夫が恋愛をし、妻から離れて恋人のところへいつてしまうと、妻は夫よりも夫の恋人を憎む場合がある。そして夫が恋人と生活をしはじめ、かなりの年月がたつても妻は絶対に離婚しない場合がある。こういう妻の態度は、他人からみるとまことに不可解である。

もっとも、男と女の立場が逆の場合もある。しかし男が、恋人のところへ出ていった妻と何年たつても離婚しない、と考えるだけで、女の場合より滑稽な感じを起させるのはなぜだろう。

由見子も、夫のいなくなった妻が絶対に離婚しないとガンバッテいるのを見たり聞いたりするといつも不思議に思っていた。メロドラマ風にいうと、心ここにはない男を待ちつづけるというのは執着だろうか。夫と恋人が永遠に結婚できぬようにとの思いをこめた復讐なのであろうか。夫の恋愛を認めぬという意思表示なのであろうか。夫は旅のあと必ず帰ってくるという確信なのであろうか。それとも、それが妻の「愛」というものなのであろうか。由見子は結局わからなかった。ところが、その難問を考えざるをえないところへ、由見子は追いこまれた。

他人事は他人事であるが、妹の未知子が、「絶対に離婚しない妻」となってしまったのである。未知子もやはり、当事者となるまでは由見子と同じように、「絶対に離婚しない妻」というのは永遠のナゾだと笑っていたのだ。由見子と未知子は年子なので、小さい時からふたこのように育つてきて、娘時代から女の立会うさまざまな難問をいっしょに考えてきたのだった。

由見子の前に、妹の未知子が、「絶対に離婚しない妻」となってあらわれた時から、由見子はその難問を考えざるをえないと同時に「絶対に離婚しない妻」を観察せざるをえなくなってしまう。

未知子は当事者となり、もう「絶対に離婚しない妻」を永遠のナゾなどと笑わなくなった。同時に、由見子も笑えなくなった。

世の中には、いろいろムツカシイ問題がある。人類の運命、国の運命にかかわる問題から、今晚のオカズはなににすべきか、という問題までいろいろある。「絶対に離婚しない妻」がなぜ絶対に離婚しないか、という問題は、人類の運命より今晚のオカズの方に近く思われるが、はたしてそうだろうか。今、「絶対に離婚しない妻」が、由見子の妹未知子という無名の庶民大衆のひとりだから、その問題は今晚のオカズのレベルの問題かもしれないが、もし未知子が王様の妻とか、権力者の妻だとかの場合なら、その問題も政治的問題に発展するか、または墮落する。そんなことは別にしても、「絶対に離婚しない妻」は意外にむづかしい人類の永遠の問題かもしれない。

とにかく、由見子には他人事だから不可解であった疑問が、身近になり、日常の中に侵入してきたのである。

「ねえ、どうしてなの？」と由見子が問うと、「とにかく絶対に離婚はしないわ」と未知子はい、その、絶対に、という言葉のおそろしさに、由見子は改めて戦慄を感じるのだった。

妹の未知子は、それまでの解放的な性格からは想像もできないほどに自分を閉じて喋らなくな

っていた。なぜ絶対、離婚しないのかを、絶対に説明しようとは思わないのである。思いなしか、顔付も変り、「絶対に離婚しない妻」の顔とはかくやと思わせるような、良くいえば意志的な、悪くいえば頑迷な顔となっている。態度も、まさに絶対的であり、アイマイを許さぬという態度である。由見子は、妹ながらも、未知子に近寄りがたい威厳さを感じるのである。

「当事者になってみないと絶対にこの気持はわからないわ」と未知子はいった。

また、絶対が出てくる。絶対にわかるまい、といわれて、それなら絶対にわかつてみせる、と由見子は思わないが、他ならぬ妹のことだから、少しはわかりたいとは思うのである。しかし、いくらわかりたくても、これだけは絶対に、好き勝手には当事者になることはできない。

由見子は妹からいかなる説明も得られないから困りはてている。とにかく、絶対という言葉はおそろしい。妹の未知子は、「絶対に離婚しない妻」となる前は、絶対主義の大嫌いな、相対的なものを考える人間であったのに、と由見子は思い出している。

「ゼッタイなんていっちゃあだめよ」と由見子はいった。

「姉さんにだって、絶対にわたしの気持はわからない」と未知子はくり返すばかりである。

さて、このゼッタイという岩石をどのようにつきくずせばいいのだろうか。絶対主義におちこんでいる未知子本人が少しでも喋り出せばいいのである。つまり、そのゼッタイに到った道筋を。

「わかったわ、なぜ絶対に離婚しないかというと、嫉妬なのよ」と姉は誘いをかけた。

「え？ 嫉妬？」と未知子は驚いたので、姉は絶対主義者の妹に嫉妬があるにちがいないと読ん

だのだった。

大昔から、人間は嫉妬に悩まされつづけてきているが、その悩みを解決してくれる哲学者はいっこうにあらわれないようである。もし結婚の制度がないならば、「絶対に離婚しない妻」はいなくなるだろうが、自分のところから離れた男を「絶対に許さない女」は出てくるだろう。世界のどこかに必ず戦争している男がいるように、ゼッタイの女たちも必ずいるだろう。そのうちのひとりが、今由見子の身近にいたのである。

「嫉妬なんかしないわよ、あんな女に」と未知子はいった。

この未知子のいい分から、由見子はひとつのことがわかった。ゼッタイの未知子は夫の恋人を「あんな女」と見おろし、「あんな女」と見さげることによって、自分が夫の恋人より上位の人間だときめたいのだ、ということがわかった。「あんな女」というのは、あきらかに、「あのようにつまらない女」の意味であって、決して「あのようになすばらしい女」の意味ではない。だからといって未知子は、「あんな女」をいいと思う夫も「あんな女」と同じように「あんな男」だと思っているかどうか知らない。

「とにかく、おいしいものをたくさん食べて、いやになるくらいにねむったら？ 食べてねむれば、たいていのことは解決するわよ」と由見子がいうと、「やっぱり、自分の身にふりかからないと、こういうことは絶対にわからないのよ」と未知子は怒った。

「くやしい？」と姉は妹に問うた。

「くやしいわよ。家にあるお茶碗はみんな割ったし、あのひとの背広も鋏で切ったわよ。障子紙

なんて、全部破ったわよ。急須を投げて台所の窓ガラスも割ったわよ」と妹はいった。

嫉妬は一種のエネルギーだと由見子は思った。

「でも、割れたお茶碗やら、窓ガラスの破片やら、切りきざんだ服やらを、ひとりで片づけるのって、とってもミジメね。だから二度とはやらないけど」と妹はいった。

ひとりの女が、だれもいない部屋で、茶碗を投げ、急須を投げ、窓ガラスを破り、背広を鉄で切り、障子紙に向ってボクサーのようにこぶしを突っこんでいる時、男は「あんな女」と茶を飲み、あるいは酒を飲み、現在と未来を語り合っている。破壊している女は、じつは茶碗や窓ガラスや背広や障子をこわしているのではなく、だれもいなくなってしまった世界を、力いっぱいこわしているのだ。茶碗を壁に向って投げつけると、茶碗でなくその壁がこわれて、夫のいる世界に通じるトンネルができるかもしれないから、思い切り茶碗を投げるのだ。食器棚にある茶碗がみんななくなるまで——。壁の向うの夫のいる世界には、夫だけでなく、人間がいるのだ。そこは人間の世界なのだ。しかし、自分のいる世界には、だれもない。だからもうそれは世界ではないのである。

「かわいそうだわ、未知子」と姉はいった。

「かわいそうだなって、姉さんにはじめていわれた」と妹は久しぶりに笑った。

「未知子は、全世界を向うにまわして、たったひとりで闘っているのね」

「そうかもしれない。姉さんだって、向うの世界にいるのよ。あたしはひとりなのよ」

「そうなのよ、未知子はひとりなのよ」

或る時ふいに理不尽に、人間のいる世界から、たったひとりで追放される。追放されるのではない、人間のいる世界からひとりだけひきちぎられるのだ。いやそうじゃない、夫とふたりでつくっていた世界から、夫がずらかって向うの世界へついたのでないか。それなのに夫は、向うの世界へついで、秘密結社の秘密を堂々ともらしているのだ。「妻が絶対に離婚しないというので」などと、ふたりの世界の秘密を向うの世界にもらしている。ふたりの世界の秘密だったものが、夫が向うへいったことで、向うの世界には「つつぬけ」だ。なんという恥かしさだろう。

「姉さん、あたし恥かしくて外へ出られない」と未知子はいった。

「それは未知子の妄想よ」と姉はいうが、妹にとっては、妄想が唯一の自分の世界をひろげる遊戯だった。

向うの世界へいつてしまった夫は、無邪気に、無頓着に、ふたりの世界の秘密を喋っているだろう。たとえば、妻の悪口でなく、妻は料理が上手だった、というようなことも、秘密をもらしたことに変りはない。夫は、妻だった女との生活でついた癖を、新しい女との生活でふり落とすのに苦心しているだろう。それは、外国へいって、日本での生活の癖、つまりなじんだ土地の生活習慣が邪魔になるのと同じように、意識的にもみつぶされるだろう。とり残された女は、昔の家にとり残されたカマドのように、新しい電気釜の前ではホコリをかぶってうちすてられているのだ。

由見子は、妹がかわいそうだと思ふ一方で、「絶対に離婚しない妻」というゼツタイ主義者と

なつた未知子の言動におかしさを感じている。「絶対に離婚しない」というくらいだから、未知子には「結婚」が絶対的な価値をもっているのだろう。未知子は結婚に対してゼツタイ主義者だったから離婚に対してもそうなつたにちがいないのである。

「これからどうするの？」と姉が問うと、「大丈夫、ひとりでやっていけるわよ。絶対に離婚はしないけれど——」と妹はいった。

未知子の様子には、「絶対に離婚しない妻」と同時に、「ひとりでやっていく」ことに意欲的で、ハレバレとしたところさえ見えるのである。老年になつて妻に先立たれた男がたいてい元気がなくなるのに比べて、同じく老年になつて夫に先立たれた女が一年もすると夫がいた時以上に元気ハツラツとなる、そんな感じが未知子にもあつた。

姉妹は、同じ暮し方になつてしまつた。姉も妹もひとりで暮していることには変らないのである。姉はずつと独身であり、妹は結婚したが、「絶対に離婚しない妻」となつてひとりでいる。しかし、同じひとりではあるが、姉には、友人のようでもあり、恋人のようでもあるような男がいるが、妹には、「絶対に離婚しない」が離れてしまつた夫が遠くの別の世界にいただけである。

妹の未知子は姉にもホントのことを喋つていない。茶碗を投げた、服を切つた、というようなことしか喋らなかつた。昔の物語に出てくる女のように、生霊となつて夫の恋人を苦しめたいと思つたことは喋らなかつた。夫を苦しめるには、夫のもつとも困ることをすればいいのだが、それがなにかを考えつづけたことは喋らなかつた。下手な推理小説のようなひと殺しの完全犯罪の筋書きを考えようとしたことがあつたのも喋らなかつた。

結婚が、人間のつくった制度であることくらいは、未知子にもわかつていた。その制度、つまり、男ひとりと女ひとりが一対になって暮す制度は宗教で定められる国もあるが、科学と工業でつくる文明国にはもつとも便利な制度だからひろがってきた、というくらいは、未知子にも考えられた。経済的単位としての結婚という制度に、人間の性と愛を完全に一致させようとすると無理がでてくるのは当然だ、というくらいは、未知子も思っていた。

結婚する前にも、そして結婚してからも、それくらいことは考えていた。毎日毎日と考えていなかったが、根本のところ、そういうことは考えていた。制度には矛盾が出てくるけれども、その矛盾が人間の生活だ、と楽しむところさえあった。

それなのに、夫が恋愛して、恋人のところへ出ていってしまうと、すべての理屈はあつという間に退場してしまったのだった。

「未知子、思いつめない方がいいわ」と姉はいった。

「思いつめない、なんにもわからない」と未知子はいいい、「絶対に離婚しない」のはそのためだと思ふのだった。もし離婚してしまえば、結婚は即座に過去になり、即座に過去から自由になつて、「新しい人生」は思いつめずにいた分だけ簡単にはじまるだろう。

「姉さん、ひとりで考えるから、同情しないで」と妹はいった。

「見物してるわ」と姉はいった。

妹は失った服のボタンをさがすような気分になり、姉はなぜか、夕闇の空の光を反射する野原を見はるかすような気持になるのだった。

最初の段のまちがいに気がついて、せっかく編みすすんだセーターをほどこいていくように、または、見終った映画の、気になるシーンのいくつかの詳細を思い出してみるように、未知子は自分の結婚の断片をとり出しては、自分のアタマの中の映写機にかける。

気になるシーンをとり出して、納得するまで見ることで、なにかがわかるかもしれない。結婚とはなんだったのだろう。夫とはなんだったのだろう。自分の「結婚」を見るために、真暗な映写室に入って、当分はその暗闇の中にいようと未知子は思った。暗闇の部屋の中にいる間に、世の中がひっくりかえっているかもしれない。暗闇の部屋から出た時には、浦島太郎のように髪が一瞬にして真白になるかもしれない。ひとびとの生活の仕方が変わり、ひょっとしたら言葉さえ通じないかもしれない。それでもいい、と未知子は思った。

姉の由見子は、妹のそんな計画も覚悟も知らなかった。

未知子が暗闇の映写室にこもって、由見子の前に姿をあらわさなくなったところ、未知子の夫である太郎次が、すでにいっしょに暮している恋人治子をつれてあらわれた。

「姉さんならば、未知子とちがって、こういうことはわかって下さると思ひましてね」と太郎次はいった。

太郎次の恋人治子は、二十五歳だと由見子は妹から聞いていた。治子は大柄なので、由見子には堂々とした態度に見えた。

「未知子はどういってますか」と太郎次は「絶対に離婚しない妻」の姉に問うた。

「太郎次さんもタイヘンねえ」と由見子はいつてから、太郎次の恋人治子の方へ目をやると、治

子は由見子を見つめ、目でほほえむように会釈した。

「未知子が、いつまでもつまらぬことにとらわれていると思うとかわいそうでね」と太郎次はいった。

「未知子はたしかに、とらわれているわね」と由見子はいった。

その時になって、由見子は太郎次がどことなく前とはちがうのに気がついた。どこがちがうのだろう。着ているものの感じがちがうのだった。ブレザーを着ているのだが、前にはなかったスポーティーな感じがあった。立居振舞も、キビキビと軽快に見える。しかし、未知子と「結婚」生活を送っていた時と最もちがう感じがした原因は、煙草を吸わなくなったことだと由見子はやっと気がついた。

「煙草やめたんですか、太郎次さん」と由見子はいった。

「ええ、やめたんですよ」と太郎次は恋人治子の顔を見た。

「よくやめられたわねえ」と由見子がいうと、太郎次は恋人治子と顔を見合わせ、にっこりした。それは、治子のおかげだ、または、治子にいわれてやめたんだよね、というような態度を示していた。

「実際には結婚生活を解消しているのに、結婚していることになっているなんて、わたしならいやですけどね。でも未知子がどのように思うかは未知子の自由で」と由見子はいったが、未知子の自由でなく、未知子の勝手といいかけたのを、どるようにいい直したのだった。

「あの未知子が、結婚なんてつまらぬことにこだわっているのは、まったくわからないですよ。

ばくは金持でもないしね、こだわったところで、未知子はなんのトクにもならないでしょう。わからないものですね、女の氣持というのは」と煙草をやめた太郎次はやはり手持無沙汰のようだ。「もし未知子が離婚したら、太郎次さんはもう結婚しないの？」と由見子はいった。

「さあどうですかねえ」と太郎次は治子を見た。

「だって今、結婚なんてつまらぬことにこだわっているっていったでしょう？」と由見子は太郎次の恋人治子の方を見た。

治子は、なんとかいてやんなさいよ、というように太郎次を見ていた。

由見子は、自分が思いがけず、イジワルな人間なのをおもしろく思った。と同時に、未知子はひょっとしたら、楽しんでゐるのではないかとも思ふのだった。未知子は、人間のいる全世界を向うにまわしてポツンと点のようにさみしくたたずんでいるらしいのだが、そのポツンとした点がこの世にあるために、少くともひと組の恋人たちは困惑しているのである。

「男は仕事に生き、女は愛に生きる、なんてよく世間ではいうけれど、あんなの嘘よね。太郎次さんのように愛に生きるひとだってたくさんいるわよねえ。男だって愛に生きるわよねえ。でも、愛って言葉も、あんまり氣やすく使われるからかしら、値打ちがなくなつたけれど。だから、男が女で身をもちくずす、っていう方がかえってステキにひびくわね。そんな男のひと、昔からいっぱいいいたわよね。仕事に生きるのは男の専売特許じゃないわよね」と由見子は治子に話しかけるようにいい、太郎次を聴き手にまわした。

治子は、大きな目をパチパチさせて、由見子のいうことを聴いている。やはり、文明の光に照

らされる、自由、平等の時代であるから、男も恋人も、夫に去られた妻の姉もみんな明るく喋っている。江戸時代のように、男は恋人をつれて心中の道ゆきなんてしない。

「とにかく、男と女を結婚という制度でしぼるのはおかしいですよね」と太郎次はいった。

「でも、太郎次さんだって、それをしたんだから」という由見子は、自分が結婚という制度にはまったことがないからいえるのだと思った。

太郎次が立ちあがった。治子も、太郎次の腕をつかんで立ちあがった。太郎次は治子の肩を抱きかかえて外へ出ていった。それは、いかにも男が女を保護する姿に見えた。というより、他人が自分の女に指の先でもふれるようなことがあれば、という警戒をよくあらわしていた。それを見た由見子は、十年前に、太郎次が未知子をああいう風にして自分の前にあらわれた時とまったく同じだと思った。太郎次のその不変に由見子は感心し、かつ感動した。あんな風に、まったく同じことがくり返されることに感動した。もし未知子が離婚し、あのふたりが結婚し、またいつか治子さんが「絶対に離婚しない妻」となり、また治子さんが離婚し、太郎次がどこかの××さんの肩をかかえ、またふたりは結婚し――。由見子は、永遠か永劫か的一端を見つめているように感動した。

二

由見子は、恋人のようでもあり、親友のようでもある量介を信用してきた。なぜ信用してきた